

2. なでしこ保育園(埼玉県 熊谷市)

1. 研究テーマ

園内研修、初任保育士育成

2. 保育園名

なでしこ保育園

3. 研究代表者

園長 門倉文子

4. 所在地

埼玉県熊谷市大字柿沼字遠新田 921-9

5. 定員数

120名(現員 149名)

a. 研究の目的

現在の保育所はさまざまな環境におかれた子どもたちを預かり、その背景にある多様な問題を抱えた保護者との連携を図り、ひいては地域の子育て支援のためにも相談に応じ、助言するなどの社会的役割も必要となっています。そのような状況下で、保育所として職員の資質の向上と保育内容の充実を図るために園内の職員研修をどう行うか、また初任保育士をどう受け入れ、どう育てるか等、職員の育成が重要な課題です。

そこで、保育の目標である入所児童の生命の保持と情緒の安定、さらには人間らしい感性を育てるために保育者はどうあるべきか、またその業務責任等についても研究することにしました。

b. 研究の内容(研究の概要)

保育者の業務責任について次の通り研修を実施しました。

園内職員研修

1. 保育者同士の連携について

グループ研究討議

2. 安全保育についての理解と研究

(1) 講演を聴き考える

講師 村山中藤保育園園長 高橋保子先生

テーマ「保育所職員の業務責任について」

(2) 園内外の潜在危険性の確認と対策について考える

(3) 過失責任について考える

最近の保育の中の事例発表と問題点についてのグループ討議

初任保育士研修

初任保育士自身が困っている問題について出し合い、園長・主任がアドバイスをを行う。

c. 研究スタッフ※()は経験年数

園長 門倉文子(38年)

保育士 渡辺里美(27年) 塚越純子(25年) 矢田喜美枝(23年)

久住詠子(21年) 大関友子(11年) 橋本睦美(11年)

金子和世(9年) 河辺陽子(7年) 栗原直美(5年)

渋谷加奈子(5年) 逸見恵子(5年) 鈴木志穂(4年)

下河原有美(4年) 小坂橋康利(4年) 森田美由紀(4年)

福島淳子(4年) 島崎奈津美(3年) 馬場奈津美(3年)

小暮幸子(2年) 大泉容子(2年) 桜井和美(2年)

新井比沙子(1年)

看護師 飯田佳世(12年)

栄養士 荏原千尋(4年)

d. 研究の方法

- i 保育は保育者一人の力が優れていても、職員全員の力が集結されないと良い保育はできないので、「職員同士の連携」をテーマに話し合いを進める。
- ii ベテラン保育園長高橋保子先生の講演を聴き、命の重みについて、過失責任・不可抗力・記録の意味を教えていただき、保育の中でどう生かして行くのか検討する。
- iii 園内外の潜在危険性の確認とその対策
それぞれの担当の子どもたちとの生活の場である保育室園舎等について、より具体的に「もしも」という場面設定を考え整備する。
- iv 過失責任について考える
なでこの最近の実践事例発表、さらにその問題点について担当者別グループ討議。
- v 初任保育士との話し合い
保育の中での業務責任については、すでに新学期に本園のマニュアルに添って確認済なので、「現在困っている問題」を出し合い、その対策について話し合いをする。

e. 研究の実施状況(研究の具体的な内容)

〈職員同士の連携についてグループ研究会議〉

7月末に、子どもを保育者同士が受け渡す際に転落させる事故が起きた。当園開園以来初めてのできごとであり、驚くばかりであったが、保育者同士の意思の疎通がなかったことが大きな要因であった。幸い子どもは検査の結果、特に異常もなく通園しているが、命を守る観点から職員同士の連携の重要性を感じ、「連携」について研究会議を進めることとなった。

－ テーマ －

- ・相手に伝えたいことがあるのに伝わらないもどかしさの体験
- ・連携をとるための人間関係で困ったこと、気付いたこと、悩んだことがあるか

《Aグループ》0歳児担当

－ 保育士同士の連携 －

- ・子ども一人ひとりの成長発達や健康状態を把握し、保護者との連絡や子どもへの接し方を話し合って統一する。
- ・担任同士で話し合いの場を持ち、意志の統一をすることが大切。(子どものことを一番に考えて、保育士同士が子ども一人ひとりのことについて話し合い確認しあう)
- ・保育中の役割分担については、状況判断した上で臨機応変に行動する。
- ・保育士同士の言葉かけも大事。「抱っこしててね」などと、声に出して連絡しあう。

－ 離乳食についての話し合い －

- ・月齢に合った食事を与えるためには、保育士・調理員が離乳の基本を学ぶ必要がある。そのための研修を、年度始めに栄養士・看護師を加えて必ず行うようにしたい。
- ・離乳の進行は個人差があるので、個々に合わせるため担任と調理員は常に情報交換をし合うよう心がける。
- ・アレルギーのある子の場合、主治医より除去食指示票をもらってその指示に従うが、園全体に連絡する。また、担任以外の保育士も保育にあたることがあるので、クラスに掲示し誰でもわかるようにする。

[食物アレルギー除去食例]

園児名	疾患名	原因食品	除去するアレルゲン
S.E君	食物アレルギー	卵	生卵(卵、マヨネーズ) 卵を用いた料理(オムレツ、卵とじ) 卵を用いた菓子(クッキー、ホットケーキ、カステラ、プリン) 卵をつなぎとした料理、食品(ハンバーグ、はんぺん、かまぼこなど)

M.H ちゃん		卵	卵白 ※検査中にて指示票待ち
---------	--	---	----------------

《B グループ》 1 歳児担当

- ・0 歳から 1 歳になると子どもの動きが活発になるので、担当者がどのように役割分担して動いていくか、保育士同士の声かけがとても大切。
- ・言いづらいこともあるが、口に出して伝えないとわからないことも多いので、保育士同士の言葉かけはとても大切。
- ・保育士同士のチームワークが良いと、保育士自身の気持ちも安定して落ち着いた保育ができる。
- ・新学期は、当日の保育の反省点についてその日のうちに話し合いができていたので次の日の保育につなげることができ、お互いの意志が確認できたが、今は途中入所児も増え時間が取りにくくなっているので時間をつくって話し合いたい。
- ・わからないことがある場合は、遠慮せずに積極的に聞いていくことが大切。
- ・自分のクラスの子でなくても気付いた場合は担任に報告し、問題があれば話し合う。
- ・子どものことについて相談したり、意見が言える関係ができていくことが大切。人の動きを感じとり、臨機応変に動けるようなチームプレーが必要。
- ・すべてが先輩なので反省したり考えたりするが、自分の考えがうまく伝えられないで悩む場合がある。
- ・言いづらいことも子どものためと考えれば、お互い言わなくてはいけないと思う。

《C グループ》 2～3 歳児担当

- ・大切なことはすぐ連絡するようにしているが、「後でもよい」と思うと忘れることがあるので気をつける。
- ・職員会議に出席できなくても、職員会の内容を細かく教えてもらえるので感謝している。
- ・全体研修が多くなっているのでプラスになっている。
- ・時差出勤のためみんなが集まる時間が少なくなっているので、引継ぎ事項をしっかりと行う。
- ・複数担任で保育の仕方が違ったので戸惑った。保育終了後に話し合いを持つことで解消された。日々確認が大切。複数の役割分担の“あうん”の呼吸が重要。
- ・複数の時、言いたいことが全て言えないところがあった。ベテランの先生と組んでいて(自分の保育経験の少なさもあるが)、意見をはっきりと言うことができなかった。
- ・4 年間複数担任を経験。組んでいる人との連携の大切さを感じた。
- ・保育を考えた時に「これでいい」ということはないと思うので、複数担任同士で話し合うことが大切である。
- ・先輩と組むことで、言いづらいと思ってしまう。言った後どう思われるのかと考えてしまうが、言わ

ないとわからず、子どもにも悪影響があるので、思ったことはどんどん言おうと思う。

- ・言ってもお互いに嫌な思いをしない関係作りが大切。

《D グループ》 4～5 歳児担当

- ・同年齢の隣のクラスの様子がよくわからなかったが、話し合いを持つことで理解できるようになったり、また、刺激を受けた。
- ・考えたり、気づかないながらもわからないことや気になったことなどは、口にして伝えることが大切かと思う。自分のクラスではないことでも気づいたことは担任に確認していくことが大切。
- ・同年齢クラス担任同士すぐに話せるが、反面「明日聞けばいい」と後回しになってしまうこともある。自分で気づくことが大切だと思った。失敗してから気づくことが多く、反省している。
- ・親との連携について、伝えたいことを伝えられない場合、先輩保育士に相談したりして話し合うようにしていきたい。
- ・話し合うことによって、気づくことや疑問も解消され、また同じ考えを持って取り組むことによって、うまく連携がとれるようになった。話し合う重要性を感じている。
- ・日々の保育に追われてしまい、必要最小限のことしか話せない状況だが、自分たちで時間をつくる努力も必要。
- ・自分が思っていることを気づいてくれるのを待っているだけでなく、口に出して伝えていくことも必要。
- ・障害児担当とクラスの連携—障害児担当はその子の問題を自分だけで解決しようとせず、担任との連携をとるように心がける。それにより大人、まわりの子、障害児、相互に受け入れる気持ちが育ち、クラスの一員であるという意識が高まる。

〈安全保育についての理解と対応〉

(1)講演を聴き考える

『保育所職員の業務責任について』— 命を守るための安全管理と危機管理 —

講師 村山中藤保育園園長 高橋 保子 先生

◎危機感を抱くことの必要性として

— 命の重みについて —

私たち保育士は、特に意識せず子どもたちを散歩等で園外に連れ出していることが多いが、外に連れ出すということは、子どもたちを危険にさらしてしまうことであり、子どもたちの命をつれて出かけるということなのにもかかわらず自覚のない場合が多い。事故や災害は散歩の途中でも起こるということを各自自覚すべきである。「この子を守る」という自覚がないと実際にそのような場面に遭遇した場合、臨機応変な動きもできずにただ女性特有のパニックになってしまうことも多い。

また非難訓練等は、事前に申し合わせをして行っている園が多いが、実際に災害が起こった時

に適切な動きができるように非公開に行い、その日のうちに反省会をし、気づきを確認することが大切である。

◎実際に起こった例「忘れられないできごと」

事例 1

遊具の下に倒れていた子を、近くにいた保育士が、見ていないのに「遊具から落ちた」と勝手に判断し、保護者に伝えてしまう。その後、その子どもの容態が急変、保護者は保育士の「落ちた」という言葉を信じ、色々な医者まわってしまった。病院では「髄膜炎」と診断されるが、保護者は認めず、遊具から落ちたせいではないかと園に訴える。最終的に和解したが、それまでに時間が長くかかってしまった。自分が見ていなかったら、見ていなかったと言えば良いのに、正しくない判断をしたことでトラブルになってしまった例。

事例 2 (0～1 歳児の混合クラスの例)

朝、保護者から子どもを受けとる時に目の充血に気づきながら保育士が一日子どもを預かってしまったため、13 人いたクラス全員が角膜炎になってしまった。一人の保育士がルール違反をしたことでクラス全員に迷惑がかかってしまった例。

事例 3

2 歳児が屋上でしゃぼん玉で遊んでいたとき、近くにあったジャンゲルの 3 段目から落ちてしまった。その後、その子がいびきをかいて寝てしまったのに、寝かせたまま保育士は他の子どもたちに給食を食べさせていた。実際は脳震盪を起こしていたのだが、園長が急変に気づき医者連れて行く。保育士の「大丈夫だろう」という勝手な判断が大変なことになってしまった例。

事例 4 (他園の例)

子どもが転落防止柵に首をひっかけてしまったのに気づかずに掃除をしていた例。

事例 5

赤ちゃんが吐いたのに気づかず窒息させてしまった例。

両例とも保育士は近くにいたが、心がそこになかったために起きてしまった例である。体だけそこにあっても心がそこになれば何の意味もないことということを思い知らされた事故であり、また日常よくありうるということを保育士は心にとめておくべきである。過失責任にならないように、子どもの命を守らなければいけない。また何が起こっても記録をきちんととっておくことが何よりも大事である。

◎潜在危険性について

まず保育室の中の危険物を一人ひとり書き出してみる。必要な物でも危険物になってしまうこと

を考えて、子どもの動きを想定して危険をチェックする。潜在危険について話し合い、整理して、各職員の意識統一をし、見やすいところに掲示しておくことが大事である。

講演を聴いて「職員の業務責任」について考える(それぞれの反省文より)

- ・自分の行動を振り返り、自分に欠けていた部分に気がついた。体だけ保育現場にいるのではなく、何よりも自分に厳しくしなければいけないことを感じた。身の引き締まる思いがした。
- ・自分の日々の保育がいかに甘いものだったかを思い知らされた。「命を預かっている意識」の本当の意味を教えられたような気がする。
- ・避難訓練ではいつも行う日を前もって知っているのでパニックになったりすることはなかったけれど、今日のお話を聞いて避難訓練について意識を変え、自分のことではなく子どもを守らなければならないということを常に考えていきたい。
- ・日頃よく『責任』という言葉を口にしたりするが、本当の意味での責任ということ深く考えていなかったと思う。園庭で遊ぶことと散歩に行くこと、どれに対しても自分が「命を預かっている」という一番大切なことをどこかに置き忘れていたと思う。
- ・命を守ること、子どもを預かることは一生懸命やっていたら充分なだけでなく、冷静な判断力と自信が必要だと改めて確認した。
- ・高橋先生がおっしゃる通り、問題を問題と気づく責任の意識が必要である。命を預かる大切さ。わかっているようで意識していなかった。
- ・一人ひとりの大切な命とは、自分の甘さでなくしてしまうことができるもののだと強く感じた。だからこそ与えられたことや目の前にあることだけを仕事として取り組んでいくのではなく、常に「これでいいのか」「今、自分はどうするべきなのか」を考え、保育をしていかなければならないと感じた。
- ・今日の話聞いて、子どもを預かることと命の重さ、毎朝子どもを迎え入れて、何ごともなく無事にお家の人にかえすまでの時間がいかに大切か、いかに大事かということを改めて認識した。

(まとめ)

この研修を終えて、それぞれの職員が、責任について改めて自分の反省をすることができたと思います。普段、日常何気なく行われていることが実は非常に危険であるということは改めて気づかされた研修でした。

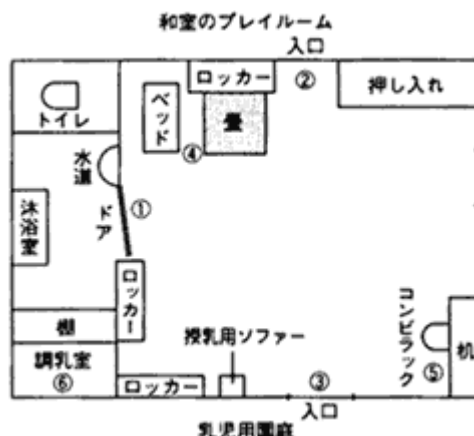
「散歩」ひとつとっても『命を連れて出かける』ことと思っている保育士はいったい何人いたでしょうか。年齢が低いうちは自分が守るという意識があっても、年齢が上がってくると次第に薄れてきてしまっているように思います。

この研修を受けたことによって、自分の保育を振り返り、事故が起こった場合どうしたらよいか再認識できたように思います。たとえ不可抗力で起きてしまった事故でも、日常起こりうると考えて、その場その場をどう対処したらよいか考えておくべきだと思います。またどんな時でもどんな事故が起こっても、しっかりと記録をとっておくことが何よりも大切であるということがよくわかりました。

〈園内外の潜在危険性の確認と対策について考える〉

[乳児室]

乳児室は室内にある生活用品・玩具等すべて潜在危険性につながるもので保育士は連携をうまくとりながら保育していくことが大切です。特に乳児は一人ひとりの成長発達が違うので、定期的に潜在危険性を確認することが必要です。

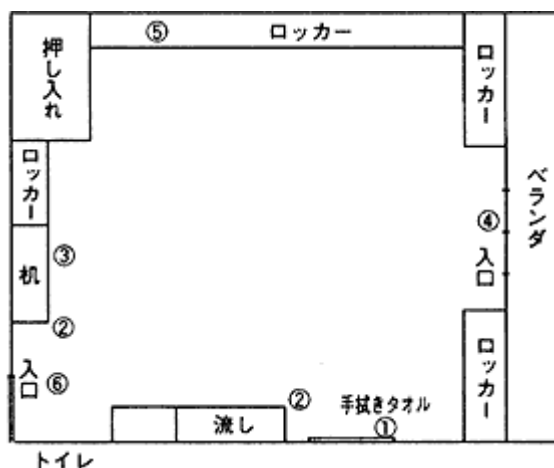



潜在危険性箇所	改善・対策
i. 乳幼児室から沐浴室へ行く出入口のドアのところが死角になる。	・ 子どもがドアのそばにいるかいないか、確認して開け閉めする
ii. 乳児室から和室の段差	・ 乳児室の床に、落ちて大丈夫なようにクッションのあるマットを敷く
iii. 入口のサッシのゴム(指や手などの挟み防止用)が破れている	・ 業者に依頼。ゴムを直す
iv. ベッドの脚や角につまづいてころんだりする	・ 脚にタオルを巻き、角はぶつかっても大丈夫なようにクッションのあるカバーをつける
v. 室内のコンビラックのストッパーがないので子どもがかかまったりして移動してしまう	・ コンビラックの置く場所を机の下の動かないところに置く
vi. 玩具の置き場	・ 子どもがドアのそばにいるかいないか、確認し誤飲するおそれのあるものは子供の手のとどかないところに置く(月齢に合わせて玩具も与え、必要のないものは保管する) ・ 棚の上の落下する恐れのある物は危険のない押し入れにしまう



[1・2歳保育室]

この年齢は活動や探究心が旺盛になり、友達
 同士との衝突も多くなります。その中で窓やカ
 ウンター等によじ登って転落したり、絵本や玩具
 が棚など高い所にあったりすると積み木・椅子
 など重ねて取ろうとしたりするので、物の配置を
 考える必要があります。



潜在危険性箇所	改善・対策
i. 手拭タオルかけのフックが金具でできていて尖っている。またフックが流しに近すぎ、子ども同士のトラブルが起こると大きなケガにつながる ii. 机・流しの角 iii. 保育室のロッカーのベニヤがはがれていてトゲをさしやすい	<ul style="list-style-type: none"> ・フックの素材をプラスチックにし、流しのところから少し離して取り付ける ・角にぶつかり防止のカバーをつける ・ガムテープを貼り応急処置する
	<ul style="list-style-type: none"> ・移動防止の止め金具をつける
iv. 入口の引き戸が両方開いてしまうので挟んでしまう v. ロッカーの上に置いてある絵本・おもちゃを口・絵	

<p>本やおもちゃは子どもの取りやすい所に置ッカー によじ登ったり積み木を重ねて取ろうとする。</p> <p>vi. ベランダと部屋の段差・サッシで手を挟みやすい</p> <p>☆ オルガンの位置が窓側なので子どもが登るとベラ ンダに落ちる</p> <p>☆ 2 階のベランダに隙間がありそこから物を落とす</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本やおもちゃは子どもの取りやすいところに置 く。又大切なおもちゃ等は保管し必要に応じてする 出す ・ 赤ちゃんがベランダに移動する時は保育士同士い 気をつける ・ サッシはゴムパッキンが破れているところを補充す る ・ オルガンの位置を窓側から移動する ・ 隙間を発泡スチロールでふさぐ
---	--

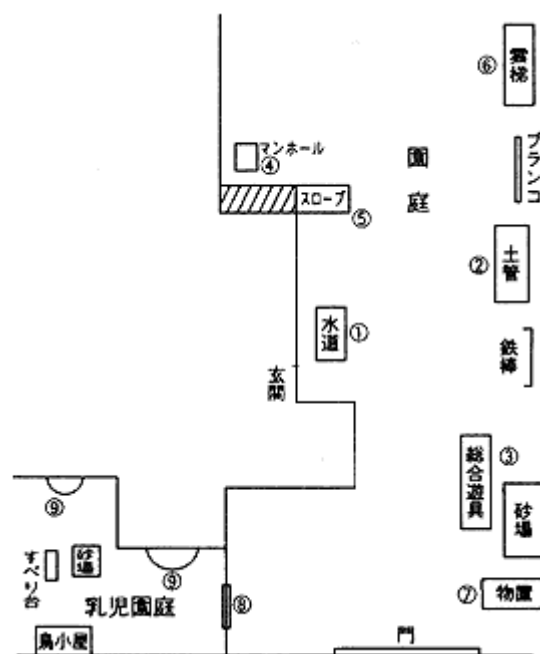
[3 歳以上保育室]

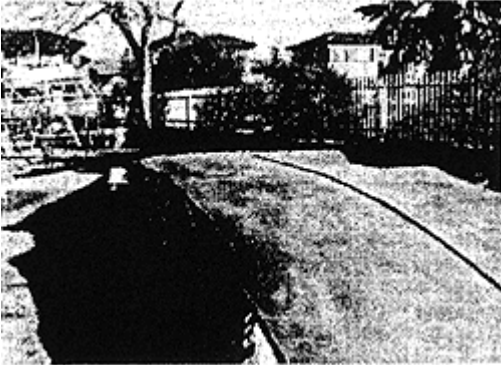
3 歳以上児になると物の善し悪しも分かってくる時期ですが、冒険心もでてきたり、また遊びも集
 団で遊ぶようになるので、予想もつかない行動にでたりすることもあります。そのため潜在危険性
 については、いろいろなことを想定してチェックする必要があります。

潜在危険性箇所	改善・対策
<p>☆ コンセントが天井からブラブラしている(コン・コード を止めるフック又はカバーで動かないよセントのた るみ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ コードを止めるフック又はカバーで動かないようきち んと止める。使用していないコンセントははずす
<p>☆ 連絡帳を入れるラックが画びょうで留まっていたは ずれやすい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ フックをつけ吊す
<p>☆ タンスの上のクロスが止まっていないので、上に 置いてある物がクロスを引っばると落ちる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ クロスをしっかり止め直す
<p>☆ 押入の下が子どもの遊び場になっているので、出 入りする時、頭をぶつける</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 押入の上部にスペラーズを貼りクッション性をつけ る

[園庭・乳児園庭]

園庭は子どもが玩具を移動したり、土いじりをして地面に穴をあけたりしながら遊びを発展させています。そのため、毎日安全確認をし、園庭整備する必要があります。また乳児園庭ではまだ歩行がしっかりしない乳児の遊び場なので、できるだけ凸凹の少ない園庭にするように心がけていますが、今回の確認の中で危険防止のために敷いたマットなどがかえって潜在危険性につながることがわかりました。再度確認する必要があると感じました。



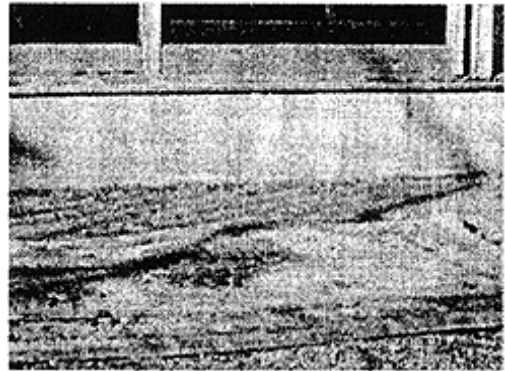
潜在危険性箇所	改善・対策
<p>i. 流しの角やヘリがとがっているので、転んだとき大きなケガになる</p> <p>ii. 土管の山のすべり止めマットの位置がずれていて、子どもが乗った時落ちてしまい危険</p>  <p>iii. 砂場を工事したため、総合遊具の登り棒と砂場のわくが近すぎて危険</p> <p>iv. マンホールの段差でつまついてしまう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・角にぶつかり防止のカバーをつける ・2枚敷いてあるマットが離れてしまうので敷き直す ・マットが山より外に出ているので縁を切る ・登り棒の棒を外す ・マンホールの段差を平らにし、削れないようにマットを敷く



- v. 北の玄関の段差防止のためつけたスロープが安定してなくて危険。またマットもはがれている。
- vi. 雲梯付近の地面に穴を子どもがあけるのでつまづく
- vii. 物置のトタンがはがれている
- viii. 乳児園庭の入口が狭いので、ワゴン車が通れず、乳児が避難する時大変である。
- ix. 乳児室の入口のコンクリートのたたきが段差になっている



※ 全体的に園庭が坂になっている



- ・ スロープを安定させマットを固定する
- ・ 地面の穴を埋め、平らにする
- ・ たたいて平らにし、修理する
- ・ 工事をしてワゴン車が通れるようにする
- ・ 平らにしてマットを敷く
- ・ ならしてできるだけ平らにする

[その他気付いた箇所]

潜在危険性箇所	改善・対策
<ul style="list-style-type: none"> ・ 夏場は2階の廊下の日よけ用よしずが内側なので風が吹くとゆれる。子どもが走ってきた時ぶつかる ・ 和室のプレイルームの出窓の網戸が子どもが寄り 	<ul style="list-style-type: none"> ・ よしずはベランダの外側に取り付ける ・ はずれないようにする

かかると倒れてしまうので危険 ・薬品類(ハイター、ピューラックス)が時々子どもの手の届くところに置いてあることがある	・必ず子どもの手の届かないところにしまう
---	----------------------

(まとめ)

以上まとめた結果、潜在危険性はどこに危険が潜んでいるか、日頃から大人が十分予測し、とり除く必要があります。しかし、生活の中で危険が予測不可能であったり、また、全てをとり除くことはできないことも事実です。そのためにも保育士は、子どもの成長に合わせて日頃から安全な使い方を教えたり、使い方によっては危険が伴うことを伝えたりして、子ども自身にも意識を持たせることが大切です。また、定期的に保育士間で見直すことにより安全への共通理解が図れるのではないかと考えます。

〈過失責任について考える〉

―事例発表と問題点についてのグループ研究会議

《事例1》9か月女児

A保育士が泣いているM子をおんぶしS子を抱いて部屋に入る際、M子を入口の戸にぶつけ、慌てて抱いているS子をB保育士に手渡そうとしたが、B保育士は泣いているM子の方を向いてしまったのでS子を落としてしまうという受け渡しミスをしてしまった。

(対応と状況)

すぐに二人を冷やしたが、落としたS子の頭のこぶが大きく心配なので脳外科で受診する。特に異常なしとの診察結果だったので園で経過をみる。迎えにきた両親に状況を説明し謝罪する。翌日両親より再度説明がほしいとの連絡を受けたので細かく説明し、こちらのミスを謝り誠意が通じたようで納得してくれた。

(反省)

- ・相手がそうしてくれるだろうと思い込んでしまった。
- ・声を掛け合わなかったことでお互いの意思が通じていなかった。

(グループ討議の中で)

- ・言葉で意思の疎通をはかるべきだった。
- ・複数担任の場合は、特に保育士同士の連携が必要。
- ・お互いに相手の状況をみて一人の人が負担にならないようにうまくコミュニケーションをとる必要がある。

◎ 複数担任のクラスは保育者の連携が必要とわかっているつもりでも、自分の思い込みで行動してしまったり、確認を怠ったり、お互いの意思を伝えきれなかったりすると、今回のような考えられないミスにつながってしまうことを改めて感じました。日々の保育の中でお互いに声をかけ合いながら確認していくことの大切さ、協力し合いながら保育をしていくことの重要性を忘れてはいけま

せん。複数担任同士の“あうん”の呼吸が身につくことが連携の理想です。また、ミスをしてしまった場合、心から謝ること、事故の状況を正確に伝えることの大切さも強く感じました。自分のミスとして謝るのは不本意な場合もありますが、誠意をもって保護者に実状を伝えることが信頼関係を保っていくには重要になるのではないのでしょうか。

《事例 2》 1 歳 3 か月男児

散歩に出かけ散歩用ワゴン車から降りて遊びだした時、一瞬目を離れたすきに K 君が落ちていた缶コーヒーの空き缶を拾い、その液がついた手で口をこすってしまった。空き缶の中にタバコの吸い殻が入っていたため、非常に驚いた。

(対応と状況)

園の近くだったのですぐに看護婦が口の内外を洗い園医で受診する。その後 K 君の様子を細かくチェック(顔色、機嫌、食欲、睡眠状態等)。母親に連絡、状況と本人の様子を知らせる。お迎えの時、再度説明、経過報告をし、念のため中毒 110 番の内容も伝える。

※中毒 110 番つくばへ問い合わせた内容

～タバコ誤飲の場合～

1 本が 8cm でそのうち 2cm 以上食べると中毒症状が出てくる。溶け込んでいる時は広がりやすいので注意が必要。誤飲後 30 分までが強く症状に表れてくるので特に症状の変化に注意する。30 分出なければ危険な状態にはならないが、4 時間経過するまで注意が必要。

- ・中毒症状:吐き気、顔色不良
- ・4 時間経過以降は大丈夫なのでそれ以降に出た症状は中毒によるものではなく、他の原因によるものと考えられる。

つくばダイヤル Q2 0990-52-9899 (9:00～17:00)

大阪ダイヤル Q2 0990.50-2499 (24 時間)

(反省)

- ・広々として障害物がなく子どもが動きまわるには良い場所だと思ったが、反面広くて目が行き届かなかった。
- ・外出する際には普段の園生活以上に注意が必要。

(グループ討議の中で)

- ・慣れている場所でもその場に到着したら、まず危険物はないか確認すること。
- ・保育者の丁寧な対応で親は安心する。
- ・目的地に着いて子どもをワゴン車から降ろす場合は、一人が見回して危険はないかチェックした方がよい。

◎ 園外に出ると解放感があり、危険と隣り合わせという危機感が薄れてしまいがちです。ましてや何をするかわからない 1 歳の子たちを危険から守ることは緊張感そのものであるが、その気持ちが慣れてしまっているのではないのでしょうか。今回の事例でもほんの一瞬でしたが、目を離すと

何が起こるか分からないことを実感し、園外にはどれ程多くの危険があるかということが理解できました。そして緊急時の対処の方法を知っておくことがいかに大切か確認しあえました。

また、ベテラン保育士の対処の方法、状況経過の記録や確認等も看護師と連携をとりながら丁寧にできたことで、親との信頼関係を保つことができたのではないのでしょうか。

《事例3》4歳6か月女児(年少・保育室2階)

お帰りの支度をしていて園庭に出るとき、子どもが先に階段を降りていってしまった。

その際、M子が押されて下から1段目(床から15cmの高さ)から落ちて転んだが、大人が誰も現場をみていなかったの、保護者にきちんと状況を伝えることができなかった。

(対応と状況)

転んで泣いているのを他のクラスの保育士がみつけ、後から降りてきた担任に伝える。

M子はどこも痛くないと言うので、担任は転んだと思い込み、その場の状況がはっきりしないまま保護者に伝えた。帰宅後吐いたので病院へ行く。父親から状況説明がほしいと電話があり、担任、看護師、主任、園長が病院へ様子を見に行く。父親は頭を強く打っていることを強く訴え、母親も極度の心配をしているので一晩入院して様子を見ることにした。

翌朝の診察で異常なし、という診断に両親は納得できないようだった。その後内科の診察を受け、風邪気味であること、精神的なショックで吐くこともあること等医師から伝えられ、母親は納得したようだった。

(反省)

- ・ 保育室が2階の場合、先に保育士が降りていくべきで、初歩的なミスをしてしまった。その場の状況を他の子に聞く等して確認しておくべきだった。
- ・ 本人が園に慣れ元気がでてきたので、神経質で繊細な面があるということを配慮できなかった。
- ・ 痛くないという本人の言葉をそのまま受け、階段から落ちたという精神的ショックを気付いてあげられなかった。

(グループ討議の中で)

- ・ その場の状況をもっと早く確認することが大切。保護者にあいまいに伝えるのは心配をさせるだけ。
- ・ 子どもの状態を調べるために人手がほしければ助けを求めるとよい。

◎ M子ちゃんは入園1か月の頃、室内滑り台から落ちて前歯(乳歯)を折るケガをしてしまったということがありました。今回の事故を伝える場合、そのこともふまえた上で保護者の気持ちを汲んで対応することが大切でした。状況を十分に説明することができないと不安を募らせることになってしまい、それが不信感へとつながっていく場合もあります。

自分でたいしたことはないと思い、安易に知らせていないか。誠意をもって対応しているか。保護者への伝え方が信頼関係を保つ上でいかに大切かを考えさせられました。

(まとめ)

事例を挙げて討論したことにより、その場の対処をどうするべきか、自分ならどうするか、意見交換の中で自分の保育への気付き・確認ができました。気をつけていても起こる事故はあるが、ちょっとしたミスや思い違いで大変なことになるということも理解できたようです。また、保護者との信頼関係がいかにか大切か、子ども一人ひとりを知り、どんな配慮が必要かを見極める力をつけることが大切ということも再確認しました。

初任保育士研修

初任保育士が保育業務の中で困っている問題を出し合い、それについて園長・主任がアドバイスをを行いました。

(1) 子どもが門から脱走しそうになったことが何回かあるので心配

園児の脱走については、昔はのどかで知らない間に帰ってしまったこともあるが、今の時代は特に危ないので注意する。子どもはお迎えの時間、他の親子にまぎれて出てしまったりするので、門当番になったら特に注意をすること。また散歩に出かけた時など、子どもの興味はいろいろで別行動したい子もいる。人数確認を常にすること。園内でも保育室から出て行ってしまうこともあるので気をつける。

(2) ケガや病気の処置について

☆打撲(打ち身)・・・冷やす(冷タオルで30分を目安に)。その後、傷のない場合はビワ酒湿布をする。

※ビワ酒湿布 :ビワの葉を入れて漬けた焼酎で湿布をすること。腫れの軽減、痛みの緩和に効果がある。ただし皮膚の過敏な子はかぶれることがあるので注意する。

☆すりきず・・・消毒(水できれいに洗い流すことが基本)。アトピー体質の子は消毒液でかぶれることがあるので注意する。

☆けいれん(ひきつけ)・・・保育士が落ち着いて対処する。静かに寝かせ服をゆるめる。けいれんの状態を観察する。(呼びかけて意識の有無・発作の時間と様子)

◎いずれも看護師を呼び、処置についての確認をする。またケガの程度により園長・主任へも連絡する。保護者には連絡帳のみの対応で済ませてはいけない、

・お迎えの前にケガの状態を確認し、悪化している場合、看護師・主任・園長などに相談し対処する。

・保護者に伝える時は、直接話すか電話で状況を伝える。またケガの程度によって帰宅後の状態を電話で確認する。

・病院に受診した場合、保険証や治療費、通院など看護師と連絡をとり合い、もれのないように注意する。

(3) 食事・昼寝等、園生活の内容について

保育の中で一人ひとりの気持ちをしっかり受けとめてやることが大切。親や子どもの気持ちまで考える余裕のない人が増えているので、子どもの気持ちを見きわめて受け入れる。

- i. 食事・昼寝
あまり無理をさせない。無理をさせることを嫌がる親が増えている。
 - ii. こだわりのある子
親や保育者が関わらないでこだわりは治らない。子どもはもともとこだわりを持っているもの。関わりながら和らいでいく。
- (4) 親との連携について、とても難しいと感じているが…
- i. 連絡帳の書き方
相手が何を言っているのか意図をつかんで答える。わからなかったら周りの先輩に聞く。親の言いたいことを受けとめる。こうあるべきという保育者側の考えと、親の考えがある。親の様子を見ながら連携をとっていくのがコツ。
 - ii. 規範能力の育成について
子どもにやってはいけないことを少しずつ丁寧に教えることが大切。
- ～先輩保育士からのアドバイス～
- T 先輩より…未満児クラスでは、子育ての経験のある保育士が比較のおんぶ抱っこをしていることが多い。声を掛け合い、若い保育士も頑張って身体で子どもと関わろう。
- W 先輩より…ダブル担任では、保育は連携作業なのでリーダーでなくても同じ担任である意識を持つことが大切。
- Y 先輩より…落ちている物、置いてある物に気をつけて使ってほしい。いろいろなことに気付ける人になってほしい。

f. 研究結果のまとめ・今後の課題と展望

今回の研究に取り組み、「保育者の業務責任」について考えを深め、職員の共通理解を図ることができたことは大きな収穫でした。そして改めて命の重みを感じ、子どもたちの心の安定の重要性そして人間らしい感性を育てるための保育者の役割についてどうあるべきか、職員一人ひとりの自覚を深めることができたように思います。

初任者については、疑問に思っていることや不安に感じていることについて日常生活の中で園長をはじめ先輩が常にアドバイスできる体制が必要ですが、初任者の遠慮もあり丁寧に受けとめてやれませんでした。今回改めて時間をとることで不安解消につながっているように思います。

毎日忙しい保育の中で研修時間・話し合い時間の確保は非常にむずかしいことですが、あえて園の体制として定期的に時間をとることの必要性を強く感じ、今後もいつどんなテーマで話し合うかを常に課題として保育の質の向上を図りたいと考えています。